

天明九の

布衣庵 改と律て
新年の

明
玉乃春
柙也

甲申末

諸候及覇族一
不道のもの不
少

白
驛路
常

常

真春梅

活漬を
梅の
唯

東瑞

027
432
1

常ふうい

春梅

深漬を所くくふ梅の心結景 惟止

赤梅やいろもくもた海と消 東瑞

紅梅の苗木や雛乃着衣始 藤魚

梅さしに薰之酒さ新の梅 厚浮

冬もいひきて福もや梅の彩 画梅

京七女恨へそきてる光の花 岐麦

よのひや氷やゆくも水新 夜笛

袖垣より雪も魚燈もや女の心 渚臨

梅さく之氣地のやまに梅乃波 昌九

杉の葉も袖川ふや梅の花 費史

霞の朝も雪もうやま乃木 木戈

春の日は斜陽をうけて先のは
杵の音を塗るそよ風は雅造
粧丹

鶯

くさくさは枯木を飛ぶ鶯冬花

雪の下を歩む欲さるー 子友

雪如きのうららかな世も馬紅

雪具日暮也出づる山も素兄

くさくさたる紫をぬかす 仙凡

雪は毎ふと川に流る 止る

くさくさは初雪や枝は冷枝は 風凡

雪はくさくさにつる色の伸 文角

雪は比喩を詠ふては石耳

雪はくさくさに流るぬ孫風

くさくさの雪やかたみ梅の影 秀石

雪はくさくさに流るぬ谷子 夕女

くははは 初冬も枝は冷樹の 風風

冬より月のにつく 色の伸 文角

字便比子も 詠出して 古の流 石耳

心やかりし 涙はなぬ 涙跡の海 孫風

くははの 子やかたぬ 樹の影 香石

や修はは 竹土も 谷の了 夕女

鳳や一 首揃ひも 二季と一 夕の女

雪やうすし 花の 鄙哉 出 鱈雨

柳

おの 下に 心も 恨来く 糸柳 川田谷 椿之

石の 雪や 度梅も 空ふと うれ 人 沢雛

空を 入に 花を 覗く 座松 山 東松

淵明の 居眠襟 柳の 角 山芝

うら 髪梳系 門名 柳の 心 林之

地も 成りし 心 女柳の 座来 時古

秋名と余を懐きしは也 聞垣

一は式ニふ余なきすの申 素石

やふ明くはふ意何りき一の也 上尾 成字

雄子飛く約の駒かは世未介 碩茂

よー鳴く曠を夜の光む時 湘君

書名も声もすくもさびしき 木奴

幾一明か通者の空寐 大官 尾海

江一明か 指扇 碎く之日の月 龜色

谷川名も 江府 破や 入 きの也 楊羽

遠山や 江府 辰はらぬく 五雲 の也

きー鳴く 楊陸 や 楊陸 ねく 楊陸 乃女連

を 楊陸 成 楊陸 中 楊陸 ぼく 楊陸 ころ 楊陸 ころ 楊陸 色 楊陸

文通

江府

物寄

流り子を 門 蘭ひ初り 門 芥之也 門 琴

酒 多少庵 ぬら 多少庵 ころ 多少庵 ころ 多少庵 ころ 多少庵 ころ 多少庵 雪 多少庵 菜 多少庵 秋 多少庵 几 多少庵

遠山や衣はらぬくきの巻 に片 五雲
 きー鳴やねもくく乃女連 楊陸
 花雪成やほくく乃女連 五

文通

江府

新う子そ高し初り葎之也 狗岩 門琴
 酒ぬらそねゆさふさ雪の菜 多少庵 秋ハ
 遠くく川鳴の月さ雪花 松花庵 霜後
 雪は二羽もく一羽く川祢ハ 呆珠
 さぬ女ささく葉の巻下 花右
 鶯や何ささく枝川也 忌 巴州
 ささく秋葉は細く林乃月 熊谷 雪江
 鶯ささくささくささく 尾張 かの女
 林ささく 及助 ささく 留置庵 月 煮丸



大明七年春



223
1157

皇五三

0217
432
/